

日本書紀傳 卅一卷 五

百二十七

和 一〇五二二 號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (136)	
函號	特 85	1

内一六六八五號



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

文清御印

青政官印

保

口次二百四十八丁小
引は怪无物語録中
清は具主高朝小向
て去詞小本一集
全居ふれど今八
虚山徒ふり遺物
人々計取高名
ふやと有御教
の重事神代

小對釋語使而差
之礼者後と有
殊小坂小克當
ふ

不可畏

ふり豈少縁の事ふらんべし
國家小當をうと賊盜律小謀及大逆者皆斬と有り世
小謂ゆる律令家心云輩ふと神代小斯と典刑の定き
事と知と階唐の制度小の之本就と者とあり思ひ
て古を信む心無とこと憐む可と且惡と可と事ふり
○及矢可畏之縁也、古事記小小此還天可恐之本
素利と有とと諾い難し第一一書小同文有と可
畏と於曾流語志と有と記小可恐と有と訓小合と
るを畏と字を伊牟と訓む事、甚有ととと所思由
と欽明天皇九年御記小可畏天皇と云事二所出た
小可畏を加志古伎と訓たり故是を以て予、可畏之

内一二六八三號

○日本書紀傳三十一

○二百四十一

縁也ト加志古志登伊布許登能母登那理ト訓べらる
思成ぬる然るハ毋及矢の事ト口訣ハ反矢可畏之縁
也者軍箭入時敵射又失其矢則失利作ハ鳥鴉ハ蜂ハ熊ハ以箭
為密之旧例也ト云ハ其説ハ依テ通證ハ野必ハ大曰
本邦自古以鴉ハ為箭羽ハ禳産屋及病家以墓目鑄射邪
鬼之法必用鴉尾羽箭或武官簡錄表指箭鴉尾矢鴉
羽是取鴉性毅而耿介聞不知死能驅邪氣也今按蜂鴉
亦取其雄武鴉神武天皇御見瑞鷲日本武尊化白鳥皆
見本紀初學記鴉羽射鴉之箭皆拂國箭也ト注スと大
予其然ハ事ハ在キと予ハ見ル所トハ大ハ小異ナ

カ然ル右ニ百ニ十六丁ニ小任ハ如ク古事記
ハセ御在リ坐リ所ハ示諸神ト有ハ後來君上ハ向奉
少不忠を働ク不敬ト為シ者ハ誠ヲ示シ捉メ給
ハシ考合ス時ハ軍陳ハ矢入ハの時ハ敵ハ矢を取
テ射返ス時ハ其利ヲ失ヒて為ス雖ハ其トハ
射返ス被シ射返ス可シ其及矢ヲ為シ為シ為シ
手ヲ徒ニて敵ハ矢入ヲ待ミ事ハ然ル計ハ前後ヲ
争競戰場ハ然ル近遠ハ事ハ有ベ非ズ正通
士清ハ人ハ我道ハ先生ハ雖ハ斯ハ所ハ至ス
也ハ猶ハ一書生ハ事ヲ脱スとス事ハ甚ニ詮無シ事

たりける古事記小妖還天可怨之本也と有る其愛た
 事小て在る記傳十三丁四十小妖註八字ハ後人の日
 本紀を以添た多ふむと師の云とつ子信小然あり
下と云れ其註とた小下されさるる遺憾し事
 かりりと万世小我皇學の師と仰と縣居鈴屋二翁と
 然り況て其末輩小於てハ今更小公限小ハ非りけ
少古小引るハ口訣ハ今本ふり通證小拳北たさハ
山鶏蜂鴉鴉鷺羽と作り然るさ時ハ熊ハ獸ふり
蜂ハ火ふり何を用以てう矢小ハ作べさ蜂鴉と云ハ
和石拵小角鸞辨色立成云角鸞久方太加今按所出未
評但角者七角之義歟ち是ふやを彼知久万と云ハ
其其角字ハ義小して喙ハ尖利小して毛物を刺を以
て去い久万ハ其爪を以て能物を拘むを以て号す所
ふ多可りとバ通證小引とた々本を以て正しと為り

△平家物語茶筌撰
 中府の除小高倉院
 嚴島御幸の時三十
 本切五明神ハ神將
 有一江日ハ九龍
 あり平家都を毒
 弘明神主佐伯景
 帝の御施入明神
 の御秘藏ふり日ハ
 故院の御情希業
 カ御守下り可し以
 願を持せ給ひた
 ハ歎の矢ハ却りて其
 身小中り疾へしと
 祝言ハ進しとらふ
 云と有ら音指返
 矢可畏と云と談と
 世人ハ口ハ事ふり
 故小取去し申せ
 りし昔と見えたり

べり楮返矢可畏と云ハ妖時の雉候使と並べて古
 あり楮返矢可畏と云ハ妖時の雉候使と並べて古
 う遍と世人の諺小云来き事妖世人所謂に有るを以
 て著明さぐ妖ハ掛さるし甚し可畏と天皇小射向い
 奉る時ハ其及矢の御刑戮有て立處小家を亡し身
 を滅しと云ふ皇祖天神の御定制御在し坐を以て
 世人其及矢を可畏と云傳へて天皇朝廷の威威に大
 御稜威を凌犯し可らさる事を諺と為つる者あり
 乃り然れば妖及矢を本本として何れの兵器を以て心
 天皇小敵對し奉る者報正小如妖如有らあり
 歴乞御紀小書させ給へる御事跡の一二を擧て万世

小至り迄然る莫氣無_二心_一を懐_二朝家_一を夢如_レ奉_レる
僻者_レの鑑誠と_レ先_レ天皇の御事を天壓神と稱奉_レる御
事_一より証_レし申_レ可_レし傳_二廿二_一百_二四_一十_一小_一粗_レ注_レ奉_レる
如_レ神武天皇戊午年御紀頭八咫鳥を大御使小立_レ
せ御在_レ坐_レて虜を徵_レせ給_レふ所小鳥到_レ其宮而鳴之
曰天神子召汝怡特過_レ々々兄磯城念之曰聞_二以_一曰_二天_一壓
神至而吾為_レ慨憤時奈何鳥_鳥若_レ以_レ惡鳴耶_略中次到_レ弟磯
城宅而鳴之曰天神子召汝怡特過_レ々々時_レ弟磯城慄
然改容曰臣聞天壓神至旦夕畏懼善乎鳥汝鳴之若_レ以_レ
者歟即作_レ葉盤八枚盛_レ食饗之と見えて_レ以_レ方_一より天

神子と名乗_レるせ_レるに御歎方_一より天壓神と稱奉_レる
事_一より畏懼れ奉_レる謂_レあ_レる_レ諸天壓神と聞え_レ
る御名_一矣_一以_レ前_一小_一我_一是_レ日神子孫而向日征
虜_一以_レ逆_レ天道也_一不_レ若_レ退_レ還_レ示_レ弱_レ礼_レ祭_レ神_レ祇_レ背_レ負_レ日神_レ之_レ威
隨_レ影_レ壓_レ蹶_レ如_レ以_レ則_レ曾_レ不_レ血_レ又_レ虜_レ必_レ敗_レ矣_一と有_レる大御詔の
如_レ日神の威を負持_レし御在_レ坐_レて影の隨_レ小_一壓_レハ_レ蹶_レ
せ御在_レ坐_レて_レ錢_一を以_レて天壓神と稱奉_レれ_レる_レ然_レし
て後_一小_一今_一以_レ高_レ皇_レ產_レ靈_レ尊_レ朕_レ親_レ作_レ賢_レ齋_一と云_レ莫_レ御_レ在_レ坐_レ
て其_一四年御紀の詔_一小_一我_一皇_一祖_一之_一靈_一也_一自_レ天_レ降_レ鑿_レ光_レ助_レ朕
躬_一今_一諸_レ虜_一已_レ平_レ海_一内_一無_レ事_一と有_レる如_レ皇_一祖_一天_一神_一の_一大_一御

△故事云小伊周公
の花山法皇を射奉
りて御事申奉る
馬今同給ふ事
の御事申奉る
事正近き事
公衆に御事申
ハ格別事申
同書小字注左
天皇崩給事然
左府不語歌程
天皇云々有左
府不語長公事
り保元の乱の流
小中より流矢
何返矢の流矢
天矢の流矢事
と聞ゆ

靈を仰戴す御在り坐が故に其兵威の強盛に御在
一坐す御事顯身の為得べし御有状して御在り坐ぶ
りれば(實)天歷神と稱奉る事實小良は(大御
名なり但以其天皇一所小限奉る可き非天神
御子と御企在坐て天統を受継せさせ御在り坐す上
千万世の後と雖も等々と天歷神にて渡り給へる
御事申奉る小更なり先其天歷神の御事
御事申奉る小更なり曲し明しめ奉り知や非
し詳し小知し難し御事申奉る故小云ふり贅言と
思ひて後小見 備其天歷神不敵向以奉り逆状御企
を為す者小立處小及矢の御罰を以御在り坐す事

定まら御制あり小其御紀小天皇使敬兄猶及弟猶
者中略時兄猶不來弟猶即詣至因并軍門而告之曰臣兄
兄猶之為逆状也聞天孫且到即起兵將襲望見皇師之
威懼不敢敵乃潛伏其兵權作新宮於殿内施機欲因請
饗以作難願知以詐善為之備天皇即遣道臣命察其逆
状特道臣命審知有賊害之心而大怒詰噴之曰虜尔所
造屋尔自居之因按劔弯弓逼令催入兄猶獲罪於天事
無所辭乃自蹈機而壓死と有る天皇と亡以奉りし
為小設置る機り即其身を亡ふ器と成まらり忽小
及矢の御事有らり又其頭八咫鳥を遺りて兄

磯城等磯城を徵給ふ所小時家磯城中略因以隨鳥詣到
而告之曰吾兄兄磯城聞天神子來則聚八十梟師具兵
甲將將與決戰可早圖之天皇乃會諸將問之曰今兄磯城
果有逆賊之心召亦不來中略乃使弟磯城開示利害而兄
磯城等猶守愚謀不肯伏中略越墨坂自後夾擊破之斬其
梟師兄磯城等之有先小大御使を遣ふ也給へる所
小乃鷹弓射之鳥即避去と見え乃れは其の反矢を以て
死れし例と爲へるなり若し後小皇師遂長髓後
連戦不能取勝時忽然天陰而雨水乃有金色靈鷲飛來
止于皇弓弭其鷲光暉煌狀如流電由是長髓後軍卒皆

迷眩不復力戦と有り其より皇軍の御勢加はる御
在し坐て怒小凶徒天誅小伏唯類無さ小至れり即
天壓神の天壓神はる所以小し其御勢自然小反矢
の御首小合へる者なり甚可畏しふと云む中々
小尋常あり御事小なり 其將獨以天皇の御上の事小
ハ非後也天皇小於て小女
、違はて給ふ所無さ事小なり
日本磐余彦天皇東征之時計伏湯貴首人故化之場海
部佩室臣奉射天皇天種子命以三角石弓及玉太羽矢
射殺佩室臣計終於海部氏性と有ふと小右の列小計
へつ可 宗神天皇十年御紀小童女の詠へる事有る大
彦命其を奏しれり小小倭迹日百襲姬命の乃知此恠
言于天皇是武埴安彦將謀及之長者也吾聞武埴安彦

之妻吾曰媛密未之取倭香山土累鎧領中中頭日是倭國之
物實反之物實以之 望能志呂是以知有事為非早圖必後之告奏
給へる其童謡を以て謀反の者有る由を告知せ奉れ
るを然判コトして奉給へるして共小神の御諭ふる事申
す小更ふり次小未幾時武垣安彦典妻吾田媛謀反逆
興師忽至谷分道而夫從山背婦自大坂共入欲襲帝京
時天皇遣五十狹芹彦余擊吾媛之師即遮大坂皆大
破之殺吾田媛悉斬其軍卒有具妻の大坂口口
入を道小遮りて急ふ小打滅一給へるふり次小復復
大彦典和珥臣遠祖彦國嘗向山皆擊垣安彦爰以忌免

鎮坐於和珥武録坂上則卒精兵進登那羅山而軍之
有る忌免神武天皇戊午年御紀小天皇大喜乃拔取
丹生川上之五百箇真坂樹以祭諸神自以始有嚴免之
置也皇祖天神を祭りて軍の勝利を祈る事あり有る是小起北
多由下四百三十五丁小注可次小更避那羅山而進到輪
韓河武垣安彦挾河氏之各相挑焉中垣安彦望之間爰
國嘗曰何由兵汝興軍未邪對曰汝逆天無道欲傾王室
故舉義兵欲討汝逆是天皇之命也有彼退我進
して天兵神威賊軍を襲ふあり於是各爭先射武垣
安彦先射彦國嘗不能中後彦國嘗射垣安彦中胸而殺

焉略所見たり其事を古事記ハハ尔日子國夫玖余
 乞云其廂人先忌矢可彈尔其建波尔安王雖不得申於
 是國夫玖余彈矢者即射建波迹安王而死有て以矢
 合せの時初て用おる矢を忌矢と云ハ右の忌矢を居
 下祭れる弓矢と聞ゆふが以小彦國曹余より乞て其
 武埴安彦小先忌矢を彈くといふハ天皇の御楯と仕
 奉る將軍あつた故小彼無道の矢の中ると云事ハ決
 小無事と思定て疑無心より云せられ者か
 り果して其矢中事を得てして彦國曹余の射給ひ
 矢の外ハッと一殺ヒトヲして射殺し申され是正しく神

△後の物ぶづ保元
 物部自河原攻落後
 願西八郎云々
 下野守の言著小和
 撥同任人巖田次郎
 正清も名乗られ備
 一家の即征御出
 され大將軍の矢面
 を引退けし宣ハ
 本一家の主君かれ
 ども今ハ八逆の由後
 分り違初め討取
 て高あせし者共
 と云七果子養つ矢
 が御曹子の羊頭小加
 良理の中うて境の志
 古呂小附附たり有
 て違初め人を討つハ
 私の主従の事を用
 以て心君臣の大義ハ
 田本著く御定まり
 者あり

代小謂ゆる反矢の御事を擬び行かれ者と所見れ
 り其先申され言ハ臣天無道云々の言ハハ
 高木大神の天稚彥が惡心を以射つるあはれ以矢
 小麻賀礼と呪給ひ小事の状ハ同トらるるれども
 大似たり所有る者あり且彦國曹余の敵の矢を物
 とし為りて受られハ天皇の大余を以て謀反と
 不敵の無道ふる矢が天兵を犯す事能ハるる由と思
 へられた者わて將師の任を辱く為る景行天皇四十
 者ハ心按と為る可事共ふる小こぞ景行天皇四十
 年御紀ハ冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之戊午枉
 道拜伊勢神官仍辞日本于倭姬余曰今被天皇之余而
 東征將誅諸叛者故辞之於是倭姬余取草薙劍授日本
 武尊初至駿河其處賊陽徒之欺曰妖野也麋鹿甚多氣
 如朝霧是如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而

覓獸賊有殺王之情王謂日本武尊也放火燒其野王知被欺則
以燧出火向燒而得免一云王所佩劍藁雲自抽而藁藪
王之傍草因是得免故号其劍曰
草藪也藁雲以云茂羅玖毛王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号
其處曰燒津と有當昔東國の夷人皇化小順ハ正
朔を奉さる者共多在リハ皇子を以て言向させ
御在一坐り小賊以を欺奉りて野中小入奉り火を
放りて其野を燒巡一ハ皇子を殺奉りしと為
しハ以御事古事記ハ見えたりハ殊小安ハ
ハ執田縁起ハ倭武尊忽被誑誤計略難施其所帶神劍
自然抽出藪四面之草又開所持持囊中有火打一枚驚喜

○敵敵火向燒得免と有て以小向火を著て燒せ給へり
ハ御自行ハせ給へりハ御劍の自抽出て草を藪攘
りて給へりハ神助有あり如以ハ自他共小打合て案
外小賊を慶ハ給へり事是亦反矢の御政の御首小
合ハせ給へり事妙小奇異ハ者不ハりハ諸如以東
國ハ入立ハ御在一坐り初小然ハ神威の御在一坐り
ハハ語継ハ言傳へて然計り廣く大なる山東の國
ハハ蝦夷島小至り迄ハ行渡りて御在一坐り年ハ
有ハヤ其國ハ事ハ無ハ向平ハ御在一坐り瓦
張國ハ飯著ハ御在一坐り御事一時駿河國ハ

△西列天皇前御紀
 小大臣平群真島臣
 尊權國政飲工
 陽為太子二宮
 居簡車馬便都
 臣等之有太子
 宮之我首之
 延之使奉
 内宿禰之依
 賦之為者是也
 併金村大連
 報有之使小
 りなり次カ
 内宿の依

賊難小羅くせ給へり御幸小依れり事申すも更ふり
 古事記ハハ於是先以具御力所撰尊と有れども其小
 てハ日本武尊の御自為とせ給ふ御事と成て草薙劍
 と云ふ名矣小叶ハ難く又云々以具火打而打出火著
 向火而燒退還出皆切滅具國造等即著火燒と有る向
 火ハ火を以て燒退させ給ふ御事ハて反矢の状ハ異
 あり若て其神劍の熟田宮小鎮り御在り坐て未代
 迄東夷の防禦を為給へり御首有る事ハ傳十六卷
 二十ニ下ハ四十八丁小至る迄小注し奉れりハ合
 て讀て曉 其ハ後世ハ少々の事ハ有りりとい天
 神御子の朝廷を傾奉りしと為る類ハ非レバ措て天
 地の初より未聞さる暴逆の者有る獲我氏是なり崇
 峻天皇五年御紀小冬十月癸酉丙子有猷山猪天皇
 指猪詔曰何時如斯以猪之頭斯朕所暉之人多設兵仗

有異於常と有る通證ハ以以詔考之馬子既有綫絨足
 之衆也然則前年出諸將於筑紫亦是馬子空内以是
 之陰謀耳と有る實小見抜れたる説かりけり次ハ士
 午獲我馬子宿禰聞天皇所詔恐暉於己招聚僮者謀弑
 天皇と有る積年の謀反を漸小具賊黨ハ吐露と小至
 れり者あり若て十一月癸卯朔己巳馬子宿禰詔於
 群臣曰今日進東國之調乃使東漢直駒殺于天皇是日
 葬倉梯園陵と有て己小葬し奉れりを思へハ豫め聖
 德太子おとし謀し合せて御葬具ヤゲを己ハ調へ
 置て亡ハ奉れりなり當時以賊ハ怖小後りて物部

大連を滅し天下を暗しして佛法を弘むる奴ふり小
東漢直阿知使主と云々末わいて儒道の家ふり儒
佛の徒の君臣の大矣小疎（世教小大害多）事以一大事を以知べし
天皇然る御言を詔給はゞ御在し坐小密小謀し給
へり小ハ被賊を思（不）任小計也給ふめりしと上
小聖徳太子其方人より有り（御カレ及バセ給ハ難ト）加し然る御言擧をバ
為させ給へりちむが以賊を當時誅して天皇の御忿
をしめ奉れる人より無きころ口惜し事ふりし然
れども天下後世も至りて以が為し筆誅する人の多
きふり反矢の心計り有りりる
林直春が説ハ既
戸親見馬子之弒

殺而因循以後則馬子之罪亦有所予邪於戲廐子無孔
子沐浴之告而有敵生不武之名今按嘗聞之也上宮太
子弒崇峻天皇是則孔子論趙盾者也豈唯馬子之罪有
所分而已哉首惡之名乃在太子と云々然る言あり
然して舒明天皇前御紀小當是時獲我蝦夷臣為大臣
と有力是馬子が子あり以を豊浦大臣と云ふ其七年
小大汎王謂豊浦大臣曰群卿及百寮朝参已懈自今以
後仰始朝之已後退之因以鐘為節然大臣不従と有る
以一事を以て以双朝憲を夢如し私威を継小為りし
事想像る可し其皇極天皇元年（御紀）小以獲我臣蝦夷為大
臣如故大臣兎入鹿（更名）自執國政威勝於父と有て父
子權威を盛大小為る趣わして是歳獲我大臣蝦夷立已

祖廟於葛城高宮而為八陌之隣中又盡發舉國之民共
百八十部而造雙墓今未一曰大陵為大臣墓一曰小
陵為入鹿臣墓と有る高宮ハ葛城の地名あり以て
先小推古天皇三十一年御紀小馬子天皇小令奏て葛城
縣を以て欲為臣之封縣と請申けり天皇詔曰今當
朕之世頃失是縣後君曰愚病婦人臨天下以頃亡其縣
豈獨朕不賢邪大臣亦不忠是後葉之惡名則不聽と有
其勢母以見れば已小我有と為つるふりたり右の墓を作る續
の文小更悉聚上宮乳部之民役使營兆所於是上宮大
娘姬王發憤而歎曰蘓我臣專擅國政侈行無礼天無二

日國無二王何由任意悉役封民自茲結恨遂取俱亡と
見えり上宮太子と賊馬子とハ同意の人なり以時
蘓我氏累世の反逆の志漸成すの際小及してハ其上
宮太子の御子等を存むの必心有る所以小其封民を役
使ひて断むと為る情を呈す小至れり自茲結恨と有
を以て其より以前小ハ連和ハ事を知へ其
二年小冬十月丁未朔己酉饗賜群臣伴造於朝堂度而
議授位之事云々と有て壬子蘓我大臣蝦夷縁病不朝
私授紫冠於子入鹿擬大臣復呼其弟曰物部大臣と見
えたり冠位ハ朝廷の授つせ給ふ所天下名分カレの立つ

所是ふるを君上を蔑如し天下を愚弄^{タケラ}する事其罪以
小至りて愈大に成れり足利尊氏朝廷に皆奉り究賊
と成れる始自征夷大將軍と称り天下の奸^賊黨の首渠
者と爲れる時の状小異あらず其次小戊午獲我臣入
鹿獨謀將廢上宮王子等而立古人天兄^{天皇}と有ハ
賊尊氏が護良親王の威名を惡し諛を構へて疑し奉
れども似たり其時童謡有て下小獲我臣入鹿際^三上
宮王等威名振於天下獨謀僭立と有を見れば古人天
兄^{皇子}を立むと云ふ其名を借て人口を塞ぐ術ありて
實ハ偽ふる事上下小照し應せて知るれたり其小於

て上宮王子等を悉く小己し奉り其時小至り馬子以
下三代の積悪究れりと云べし然る小未反矢の應徴
非るハ賊首馬子が崇峻天皇を弑奉れる小上宮太子
君父の爲共小戴と可うとざる天を共小して其賊を
好しと爲給へる御報歟小来りて其祀を祈れり也
給へるおりけり其下小獲我大臣暇夷聞^{山背大兄王}
等摠被^亡於入鹿而嗔罵曰噫入鹿^十甚惡痴專行暴惡
你之身余不^亦殆乎と云るを直辞ふり軍衆を起して
四上宮を圍む計の大事を父の聞知ざる事や有べ
き其王子等小天下小心を寄り人小有けむ其
責を塞ぎ其心を慰むと爲し奸術あり已小父子
の陵を築きて大陵^小の名を設け八倫の儔を成り
あつて以て其暇夷ハ謀
主ふる可と思えたり其三年小冬十一月獲我大臣

△我子小冠位を初
小授けたり

蝦夷見入鹿臣雙起家於甘欄橋固稱大臣家曰宮門入
鹿家曰谷宮門稱男女曰王子家外作城柵門傍作兵庫
每門置盛冰舟一本鉤數十以備火災恒使力人持兵守
家大臣使長直於大丹德造梓削寺更起家於畝火山東
穿池為城起庫儲箭恒以五十兵士繞身出入名健人曰
東方儂徒者氏々人等入倚其門名曰袒子孺者漢直等
全倚二門と見えたり己小其男女子小玉号を僭ひる
上二賊大君の号を用ひたり事知る妖し
以前夏六月の下小是月國內巫覡等折取技葉懸掛木
歸同大臣度橋之時争陳神語入微之說其巫甚多不可

具聽老人等曰移風之兆也有妖神語一續紀
天甲神護景雲三年小初大宰主神習宣阿曾麻呂希旨
媚事道鏡因矯八幡神教言令道鏡即皇位天下太平道
鏡聞之深喜自負有如妖言有天下獲我氏
有有知上小天皇の御事を知ざる世有々々恠憚有
所無と然る逆事を禁め一故小心を定めて天皇の御
後を擬い行へカ者有事決一其四年六月丁酉朔
戊申天皇御大極殿と有一中大兄尊其賊入鹿を令斬
給へる小入鹿轉就御座叩頭曰當居嗣位天子之子也臣
不知罪乞坐審察と有一其時小中大兄伏地奏曰鞍作

盡滅天宗將領日位豈以天孫代鞍作耶と見えたり是
己小彼が篡逆の企有を見明らりませ給へる由の奏
言あり次小使人賜鞍作臣死於大臣蝦夷於是漢直等
從集眷屬擐甲持兵助大臣設軍陣中大兄使將軍臣勢
德陀臣以天地開闢君臣始有說賊皇令知所起と有ハ
彼資人の漢直小して蕃種の者ふる故小皇基の起る
所を知らずして漫小其逆事小與一ければ我が君臣の
義の重き所以を示諭させ給へるあり其君臣の論ハ
右の御言を引て上五下小注一奉れるが如し次小己
酉獲我臣蝦夷等臨誅云々と有て其父馬子父が掛せと

小甚も可畏き天神御子を弑奉り女主を立て無道を行
行ひける小幸小して天幸を終へ其子蝦夷其孫入鹿
父子も亦女帝の時小来て天宗を滅し日位を傾けし
と爲つる小果して其天誅を受奉る事速ふりと雖も
其弑逆の事有し崇峻天皇五年壬子一小皇極天皇
四年乙丑迄凡五十四年獲我氏の爲小反矢の御責至
るごりけるごり天下の義人をして憤悶イキドホしむる事
ありけれ思ふ小右り三賊の氏と爲る獲我ハ武内宿
臣也皇りて輔政小仕奉る大臣と成り佛法の渡来
れり信受て其家小傳ふ其子馬子父を受て天下小
弘行ハいり天皇固一受させ給はり天下悉く疑
ふ疑を以て其愚俗を誘入れし佛法の大ある由を勸

ひ其の依て堂類廣く盛小成れり故小物部大連と
共朝廷小立并ぶ事を忌て終小打亡り小至れり其
小依て其堂倍大小成れり故小天皇を弑奉ると雖
小人亦其を逆しずあうと其岸下其威小乘て又倍其
堂の大小成れり者わて獲我氏の大小成れり其法
の爲小成る所あり然して其法ハ棄恩入無為と云て
君父を以肩と爲さる事ふら合^て其資人ハ一族
を置てハ多々ハ漢直^て漢主^を靈帝^ハ遠裔あり故儀
を事とし無道と知さる固^り的^に飯化れる者共ハ
一在けれハ固^り我國家の開闢以未君臣の定りて
有る事を知さる故小其所を見尉^し語^られて馬
字^ヲ爲^ハ小天皇を殺奉れりふら獲我氏我皇國ハ故事
を知らさる者ハ有^りり^れ其佛の爲儒生
の爲ハ八虐^リ天罪^ヲ究^メたり^し者ありけり其居宅
を王宮小擬作り稀呼^を皇家ハ擬^へるあ^ら漢直
以下賊堂の勸む所ハ少^ク有^つい^と右^ハ令^知所
起^と有^る君臣の受^を知^らし^るふ^ら思^合可^し其
と同一意味あり御言ハ右^ハ引^る續^紀大^事主^神習^直
阿曾麻呂^ハ神託^ヲ矯^レる續^紀小^天皇^の和^氣情^麻呂
主^ト宇^佐宮^へ遣^ハし^て神^命と^請め^給へ^る條^ハ階

△承平の折門す
其者の天誅を得
忽ち七^一事ハ會
知^ら所^{あり}れ^ばは^はす
に及^ばず^人の知^らず
し^て暗^ハ小^天皇^の事
を^爲し^密小^朝廷^の
後^ヲ行^ひて^了逆^臣ハ

麻呂行諸神宮大神託宣曰我國家開闢以未君臣定矣
以臣爲君未之有也天之日嗣必立皇緒無道之人豈早
掃除清麻呂未歸奏如神教と有^り其時中大兄尊と後
小八幡大神の託宣へ^る御言と少^ク異^ら所^{あり}無^とあ^らい
有^り尊^ふへ^し以^し後^ハ朝廷^ヲ擬^作れる者^ハ録^倉
の頼朝^ハ其^巨塊^{あり}ける安徳天皇の天下所知食
了大御世小當りて平家の氏門甚廣と盛ふるが上小
御外戚の威權恣^ニ在^りる^ハ其^を惡^すせ御在^し坐^て
以仁親王の令旨を以て伊豆國の流人源頼朝を以て
兵を令起給ひける小東國の家人を募りて日有^ずし
て其兵威大^ニ成^れり其^ハ於^て府^ヲを^鑑倉^小居^て改^東
八州をば公私を云^り攻^取て^已が^有り^爲り^是致^逆の

志意を呈しう爲る始あり其後源義仲1185年の西上して平
氏を斥くと雖も頼朝の東陸を取事す其後義仲
京畿を擾ると聞て弟範頼義経二人を遣して令討む
實も頼朝が待つ所歟も在て其圖る所特を得たりと
云べし状あり然して二弟義仲も克ち續きて平家を
西海に逐ふ終も主上を海上に廢し奉り神劍を海
底に失しめ奉り皇后を生捕り平氏を殺戮す歟實も
依て威福恣かり其後鳥羽天皇立せ御在り坐と申せ
ども幼帝にして渡り給ひ法皇の御在り老衰とせ御在
りて朝廷の空りさか如し時も乘り其所を得たりと

平家を討たる其年文治元年十一月大江廣元と諷り
て朝廷より置せ給ふ國司王卿の莊園も置るも領家
の外も守護地頭を置て天下を制めむとて北條時
政を以て令請奉れるも甚勢も迫りて御在り坐り
む終も許可させ給ひり増鏡も以時も諸國搦追補
使と云事兼りて地頭職も我家の兵共成一集りり
る歟日本國の衰ふる始は是よりあり可しと有る然
る言つて歟より定れる租税の外も別も兵糧を倍す
るも國司領家も以て日々も衰へ守護地頭の勢も
年月も増り以行て恰も天も二日無して國も二王有

か如し勢在小倭り權家小媚るハ俗人の常なり天下の
百姓并護地頭有を知て國司領家有を知らざる小至る
其大小一してハ鎌倉有を知て皇都御在し坐す事を知
ざる小至れり其と古の獲我氏小比ぶる小其陰惡大なる事發
層と云敷を知らず其皇命を用ひざりて驕傲の甚しき
り一証ハ鎮守府將軍藤原泰衡と討し事を申請と雖
亦天下小罪無き者小一在ければハ勅許の御事御在し
坐ざりり其と古の大庭景能と云者の云ひくハ泰衡が
父祖代ハ源氏小隸ぬ今家人を討し何ぞ皇命を待む
と云進る任小終小軍を向て討滅し陸奥出羽の二國

を我有と成りたりたり是其叛心小非ずハ何と云
てやハ兼久を待て東征の御政御在し坐す事後れさ
せ給へり其と古の所思えられ其以其前其國史略小
載其云く我邦古未向朝考其若其稱曰朝敵其即逆賊
之謂也凡其為朝敵者未嘗其全其終者其也當時源氏西討雖
假名玉師其實私戰耳非其為朝廷也要之平氏有罪則可
代有離則可復唯以安徳天皇雖謂故相固平公之外孫
身擁其三器位居其方來儼然我臣民之主也豈可向帝舟發
一夫乎先是一谷八島之戰平氏族屬殆盡及逃壇浦諸
壯士存者無幾其亡可計日待也方是時矣經臣命軍士
不用急擊乎思百計奉迎天皇而後討平氏殲之彼使上
皇詔其美經有前帝亦可害之言至尊不可害焉況上皇命
西討非其典前帝之事而受經不學無術不思其以其唯以奮
擊為快遂逼帝渡海而不知身其朝敵去其是故六十六州
無地容身奔走匿生涯幸苦遂為人所害豈非神明罰
朝敵乎安徳帝在天之靈復現于東國使鎌倉右大将恐
懼墜馬而死所謂天定勝人者善惡報施昭々明于世苟

志干道者唯當惡以美謾賤亡者專褒興者淺之大夫也
哉と云々ハ實ハ予ガ心を得たり説ふる者ハ賴朝
ガ事ハ次ハ若テ賴朝征夷大將軍ハ補セられたり雖
も其名目を冒すのみにして其實ハ諸事凡テ棄輿ハ
擬たり霸業を定め職ハ在る事二十年土御門天皇正
治元年正月薨せしる世ハ傳ふる所ハ是月相摸川の
橋成テ供養ハ起り一時義經行家の靈を八的原ハ現
ハ又安德天皇の神靈を稻村崎ハ見奉り恐驚驚
馬より墜テ死けりと雖も其實ハ北條時政ハ手ハ殺
されたりと云り薩州家藏東鑑ハ其一枚傳れりて
或人の語けりといハ其婦翁時政賴朝ハ密ハ云やハ秩

父重忠夫人政子ハ密ハ通ふめり君不知やと云けり
ハ不知と答たり如何ハ一と其是非を云見駭ハ
おと聞けりハ主ハ今夕他ハ物ハ給ハ持威して忍
びテ重忠ガ如ク装ハ其夫人の内房ハ入テ試る
可ト云けれバ婦翁の言を信レ其奸父を見顯ハ
む夜歸入鎮り其内寝を叩きけりハ主ハ居ざりける事を知レ
バ重忠ハ由を云テ艶言を云たりけり政子怒
りテ其奸夫おうと思ハテ長刀を抜テ切付たりける
ハ其實の夫を殺シ打殺してけりとは是時政ハ奸計
を以テ其督を殺シ幼主を立て其權を恣ハ爲し謀ハ

安徳天皇在天の神靈手を政子小借て其朝敵を亡し
給ふ小づ有べうりける又天子を浪士の如く己王
者の如くして天下後世小禍する曲士ありければ皇
祖天神の天誅御在し坐し加り給ふ可き御事
申すも更ありく若て其子頼家立て將軍を為ければ
小時政其主を廢し世子一幡を殺して牙實朝を立
しむ又時政漸害せむの心有りと雖も果さず終り
義時執權たり其後久し之有て實朝公内大臣小成上
り直小右大臣小轉り其并賀の式を鶴岡八幡宮
少て仕奉りいそ詣りければうけふ故頼家の子公

曉小討れ小けり実義時が令討たりトありと聞
え一城大臣山の裂け海は浅あむ世ありと君小二
心我が有めやいと詠れし小似氣無とも有ける哉
抑官位を天朝より戴奉りし小自京小上りて禁
中の大庭小躊躇りて并賀の式を行ひ天恩の辱さ由
を謝し奉り可き小大饗の尊者と姑の公卿殿上人
を多く招下されたるも天下後世の爲小浅し
逆状ふる例を遺されたりければ是將暗小天朝を廢如
し皇家を輕賤め奉り驕傲の極ある者をや皇祖天神
其无礼を怒りせ御在し坐し故小時小有ければ其

并賀の事を仕奉りしらずして罷り給へり嗚呼増鏡
内大臣又右大臣の上りて大饗おと珍しく東に
行ふ京より尊者を始上達部殿上人多く訪ひ在り
けり借登倉か移し奉る八幡の御社の神拜か詣る甚
嚴のし響きおれは國の武士の更にお云す都の
人、も慮從しけり云こと有り是并賀の大饗を共
小居おろく行れいと為しけり然るれ公事か
非ず私の祝ひか大宮人を招下りふ云云甚く无礼
さ事を始りけりけり大臣おくりけりか天皇の
御為か臣下おろく何ぞ後鳥羽天皇未知至小御在り
恣小驕傲さ事を獨りて後鳥羽天皇未知至小御在り
坐けり時頼朝關東の覇を定めて朝威漸次小衰
へさや御在り坐けりさへ有る小實朝大臣亮せりけり
後北條氏凡下の陪臣か在る天下の大權を握
り朝廷を制する小世運究りれり義久三年云けり

小忍ひて思食しませ給ふ御事有けり賊將義時傳へ
漏聞て弟特居時房の子泰時と二人を首とし軍兵を從
へ都方おまきマ遣けり増鏡か云く翌日思ひ係ぬ泰
時鞭を上げて走來たり父胸打騷きて如何かと問ふ小
軍の脅べきやう大方の掟おとす仰の如く其心を得
侍りぬ若道の邊か計さる小辱と鳳輦を先立て御幡
を上げ北向の嚴重ふる事侍りぬか参り逢ふ其
時の進退如何侍り可くは以一事を尋申すいんか
獨走侍りぬと云ふ義時左計り打接して賢ま問り
男の不逆小君の御輿か向いて弓を引事か如何有む

△玉勝回思草巻小
九條康命（中奉）
ハ順徳天皇の第一の
皇太子（云々）三
年四月十日御手四
ヤシ安祥有リ然
所小来ハ賊北條
時直（荒い）忌
一ハ世ハ乱起（後）
後養時時房（ど）
ハ賊共埒カリ同（六）
月ハ夜ハ入（世）可
畏ハ三所ハ天皇
ハ遠所ハ近（一）奉
ハ新帝（下）奉
リ（一）ハ一ハ
御常（事）と云
（云々）ハ無（逆）事
の福事（有）有（云）
と云（一）ハ如（一）
針（一）ハ如（一）
事（一）ハ如（一）

然計の時ハ申を脱（弓）絃を切（て）偏（小）畏（ヤ）ヲ申し
て身を任せ奉（る）可（し）然ハ非（不）君ハ都（小）御在（し）坐（不）
ガ（一）軍兵を賜ハせて予人（ハ）人（ハ）成（す）てハ戦（ふ）可
一と云ハ果ぬハ出（小）けり云（と）有ハ然（す）ガ（一）其言
のハ（一）宣（り）けり△被賊将時房泰時二人都（小）乱入（し）
ハバ驚（せ）御在（し）坐（て）反矢（の）を（一）發（ば）射（さ）せ給
ハズ敵山（小）御幸御在（し）坐（け）る故（小）賊（の）鳥（小）後鳥
羽天皇ハ隱岐島（小）土御門天皇ハ（一）佐國（小）順徳天皇ハ
佐渡島（小）移（ざ）れ（う）せ御在（し）坐（し）當代（の）主上（を）バ廢
帝（と）成（し）奉（れ）給（ふ）後ハ何（と）ハ言（ハ）絶（た）る

大（三）大福事（ハ）有（リ）以（以）上皇（ハ）新院（ハ）御過
御在（し）坐（す）ハ恐（け）れ（ど）申（す）可（う）ズ神代（ハ）高
木大神以（反）矢（の）御政（を）行（は）せ御在（し）坐（け）ルハ以（世）
人所謂（反）矢（可）畏（之）縁也（ト）傳（へ）て天神御子不臣（の）
者（を）誅（ハ）せ給（ふ）道（あり）又右（二百四）ハ注（ろ）如（く）
我天皇ハ天神御子（ハ）御在（し）坐（せ）ハ日（ハ）向（ひ）て戰（ハ）
セ給（ふ）ハ事（ハ）良（ハ）ハ其御影（を）負（小）御在（し）
坐（て）壓（躡）セ御在（し）坐（し）以（時）天壓神（ハ）申（す）大御稜
威（を）振（ハ）御在（し）坐（い）ハ賊堂（自）碎（け）完賊（ハ）滅（小）
ハ事常（を）指（ハ）如（ふ）ハ（一）逃（遁）サセ御在（し）坐

△興義久三年辛巳
一四年有元仁元
年甲申義賊臣美
時近備の爲小殺
クニ又の累死す
云り然れども四年
の壽を借給へ事
不審し事あり
けり

すかハ皇祖天神天の既戸押張り見行し御在し坐と
争ての救奉り給ふ所を得てすは是被塊賊共
幸ふして反逆夫の天譴を速不得奉らざる所以なり天
下の大君と御在し坐て天下の逆賊を平治させ御在
し坐い小何の憚る所か御在し坐い後未聖主の御心
と爲させ給ふ可き御事なること
新井君美が讀史
余論を竊りて
平田馬胤が玉禪と云物小云けくは泰時の或僧小
世の功德と成へる事と問けるか佛刹を建てる可
き由を云けるか其言を弁けて鐘舎を遂出したりけ
りして兩人共小佛を惡む心りの泰時ハ善行有し人
ふりして譽る事あれども塊賊ハ父の歿時あり事
ハ論無し後時房泰時の人其命を養て行たり者ふ
れハ其罪父小在て渠小無しとい云ハ云る可けれ
ども京か上りて計ふ方も有るむを増鏡小東たり

云遣する任小保元の例かや院の上都の外小近奉る
可しと聞ゆれハ云ること有る其ハ當今と新院との御
戦あれハ快くぬ事ながら然も有へし是ハ人臣と
云中か小陪臣の身として朝憲を弄し聞あるを憤る
や御在し坐て御征伐り御事小及ばせ給へるふれハ
其罪関東小在る事固りあり何ぞ保元の例を取立
てハ賊將二人の計りあり又三帝を島々小流奉る事小至
る行かり可き事小非ず是泰時小逆賊の心有非ず
して何ぞ黙然ハ彼小民を愛し私惠を施し一時天下
小善行の名を得たりと云とも天地の初り以本立
定る所の君臣ハ大受小背奉りハ虐め大罪を犯せる
上ハ子孫に千萬世小至る迄如何なる善行を積む
美德を重ぬと云とも大罪を贖ふ小足ざる事苟く
小道小志す者誰りハ是を知らずむ然るを然る惡説
を吐む為小鈴屋翁の説をこへ小破りて泰時ハ善行
を張行したるハ其下に時世小何諛るのふりあり天
下の惡民を具徒小引入むと爲る奸策小過さるあり
先輩の事を如以浅くし遠云を誣りる人も有るふめ
ども然る逆賊の方人たる者を争て見道す事を得

古今著聞集小雜
 と傳傳り一かじり
 名も忘れ小かり其
 人の暗か参りて面夜
 一たうけい夢か
 御殿の御中を押開
 せ給いて誠か高
 御多うて武内と口
 此ハ申して参りて給
 云、世中乱れおいて
 姑く御殿が子か成て
 世を治む一と御
 ありけれは唯様して
 御在り坐てく居り程か
 黄信かかり知れは
 朝臣の御後身や天子
 恭所てく一人か非
 けりるこ自り其内
 名も忘れし夢か
 八幡大神君か賦てく
 臣をせし出り給ひて天
 下を乱れし給ひて彼
 朝臣共せし西國奇事
 人の君か不き御殿の
 舞か作れり君か

荒振神所を得て荒ぶる世ハ悲しき者ハ其時関東
 の計はこゝして高倉天皇の皇孫ハ御堀河天皇を
 大御位ハ即奉れり例として皇統の進退を彼
 心の任小物為る事ハ成れり其皇子四條院ハ天皇
 させ御在り坐けれは武家の計はこゝして阿波院の
 皇子ハ後嵯峨天皇を大御位ハ定奉れり平戸記ハ
 仁治三年正月十六日云々允空位及數日偏是関東所
 為也十七日云々阿波院宮依武士縁一定御出立之由
 世以風聞便縁者前内府定直奏泰時重時等姉妹也如
 此以之間私差遣使者於関東有懇懇之旨云十九日云々

云々卷説云關東飛脚此中剋許著武家云以由且申
 一條殿云依是京中物念云抑此事關東計申之條雖知
 未世之至極可悲ハ十善帝位之運更非允夫愚賤之
 所思而依今順時後給歎一旦雖被御合整以允昇之下
 愚計立帝位之條未曾有事也我朝者神國也不似異域
 之風自茲天地開之後國常立尊以降皆先王令計立給
 至不慮之事者非以限至光仁元孝二代群臣議定歎然
 而其趣偏為安天下也今非群議以異域蠻類之身計申
 以事之條宗廟之眞慮如何尤可恐云云と見えたる實
 其時世ハ遇りて人の發憤ハ然る事なり是泰時

が關東の執權たりし時あり次は後深草天皇と聞え
さすまは先帝の皇子は渡りて給へり御子御在り坐
せども上皇の御心こころして皇太弟龜山天皇は御位
を讓聞えさせ給ふ是帝王の二所は別れさせ給ふ始
かり實は北條時宗の云が後嵯峨天皇の遺詔を矯は
かりて後深草龜山二天皇の皇子皇孫更更、天統を所
知食へり由は拵たりし者あり共し以前は攝籙の
御家を以五流は別りて其權勢を己は拵つるを今
將天亂を二流は立て皇威を折りしと爲り茲謀經時
時賴時宗の三賊の事は成れり其時の状を考ふるは

林中は無主の空宮ありて高御座の所在は天津日
嗣の在りし所ありて天皇は持明院殿龜山殿の御流し
分米田當直するの之在り壇場は天皇の尊き御事と
見奉る可き天亂は却りて天皇の御威は御在り坐
りしより源松苗の國史略は二帝之孫可互嗣位の
事を書して若據以説則北條氏世に其計陰惡不可勝
誅兵鎭倉之後皇統分爲北朝南朝者凡五十年蓋是具
前北條氏之病天下也遺毒亦甚矣と云るは實は然
る事ありけり右二百五十八丁の如く兼久の乱
時二虎を狩りて成り又怪時時賴時宗等の皇統を二
流は予り奉れり病は尊氏直々の二賊は予り甚しと

△宗^一代、北條の戦
を親^一に、^一相佐の戦
奇家^一に云ふ相佐の戦
は、此の代^一、^一相佐の
謀、徳^一を長く行^一き
を馬^一たう^一か

△若て増鏡^一は、北條の戦
を親^一に、^一相佐の戦
奇家^一に云ふ相佐の戦
は、此の代^一、^一相佐の
謀、徳^一を長く行^一き
を馬^一たう^一か

成れり鬼^一魔^一人^一の賊^一、實^一小^一悪^一む可^一き賊^一ありけれ
ど、小^一民^一を撫^一育^一ひ私^一惠^一を授^一興^一へた^一り、小^一眼^一暗^一ま^一り
人^一皆^一其^一を大^一逆^一の賊^一と知^一ざるこ^一ろ心^一憂^一え有^一り北^一王^一
澤^一と云^一物^一小^一天^一下^一の天^一下^一の申^一さむ七^一強^一事^一小^一非^一
不^一と云^一り、

天津日嗣の御蔭、小^一徳

る、小^一者^一の忘^一れて、小^一云^一る可^一しや、^一下^一二百^一八^一十一^一丁^一孟^一
子の説^一、^一共^一小^一合^一北^一條^一の巨^一賊^一、其^一主^一と爲^一る將^一軍^一を、^一木^一
口^一て辨^一可^一し、^一偶^一人^一の如^一く、^一て天^一下^一の政^一柄^一を掌^一り天^一皇^一を尸^一位^一小^一
て朝^一憲^一を弄^一し、^一惡^一を積^一み罪^一を重^一ねつ、^一世^一を經^一る間^一
小^一高^一時^一と云^一狂^一豎^一小^一互^一りて、^一愈^一其^一重^一罪^一惡^一を、^一不^一む究^一め、^一た
少^一ける後^一醍^一醐^一天^一皇^一大^一御^一位^一小^一即^一せ、^一御^一在^一し坐^一り、^一始^一皇^一子^一
護^一良^一親^一王^一を以^一て東^一宮^一小^一立^一聞^一え、^一て給^一ひ、^一と爲^一り、

ど、小^一高^一時^一詔^一を奉^一る、^一て小^一於^一て初^一小^一逆^一鱗^一の御^一事^一御^一在^一
し坐^一り、^一△天^一皇^一大^一御^一心^一を定^一め、^一て御^一在^一し坐^一り、^一正中^一元^一
年^一東^一夷^一を征^一伐^一せ給^一ひ、^一と爲^一させ給^一ひ、^一と爲^一る其^一謀^一
世^一て事^一成^一さうけり、^一北^一條^一九^一代^一記^一小^一元^一享^一元^一年^一京^一都^一小^一於^一
て改^一元^一有^一り、^一と爲^一る小^一聞^一東^一夷^一を用^一ひ、^一と云^一り、^一普^一天^一の^一下^一
小^一住^一り、^一正^一朔^一を奉^一ず、^一反^一賊^一の徵^一、^一小^一出^一たり、^一と云^一べ、^一同^一
年^一八^一月^一賊^一使^一を京^一小^一上^一り、^一て天^一皇^一及^一護^一良^一親^一王^一と海^一島^一小^一
移^一る、^一ハ、^一御^一在^一し坐^一り、^一事^一を請^一奉^一れ、^一ハ、^一天^一皇^一賊^一兵^一
を避^一り、^一笠^一置^一山^一を以^一て行^一在^一所^一小^一定^一り、^一と云^一せ、^一御^一在^一し坐^一け
る、^一小^一賊^一兵^一を襲^一奉^一り、^一己^一小^一逼^一り、^一奉^一り、^一て神^一器^一を新^一帝^一元

嚴天皇小傳させ奉り翌正慶元年三月終小隱岐島小
遷一奉れり是より先小橋正成主義兵を河内國小舉
て御方の忠臣に成て賊軍を推伏する事歟ふり然して其れ親王ハ所渡らせ御在坐し小潛行て賊を討
つ事を謀給へる小二年三月天皇潛小伯耆國行幸
て名我長年を徵一船上小を行在所と成一諸國の軍
將を招りせ給ひけり小王師大小振い官軍勢を加ミて
恰も天壓神の如く向ふ所歟有る事無小至れり還幸
の御後威甚盛ふる任小賊將足利尊氏小姑と帰順い
奉り兩六波羅の賊仲時益二人を誅せり小合せて
新田美貞親王の令旨を奉り鎌倉小攻入り賊の首渠者平

高時を始として其賊黨を悉小殺一天誅を行いハ
皇祖天神皇基を護持せ給ふ所いて天下の人望小
懐い永く太平を致す可い状ふりけり源賴朝を鎌
倉小發り天下の政柄を執しより關東將軍九世權北
條氏九世凡百五十年小して亡し天下の太政天朝小復
る事實小以時ふりけりバ安徳天皇以下皇祖天皇等
の念魂を慰の奉りせ給ふ御政千載の後万世の末小
至る迄誰ハハ以を仰ぶ感け奉らざる可い其皇祖天
御在し坐けり御事ハ伯耆卷小云く事有り後醍醐天
皇隱岐國小幸坐けり元弘三年の春忍いて伯耆
國小行幸し村止又太郎源長高小仰付て船上ハ行
幸の御事を記して云く君の御供申たうと思はる

天小也地小也鳥幾千万ノ知不數多クハケリ其中
小七八尺許ハ鳥一有リ實小奇代メの事共ハ云
々ト見エたるハ神武天皇戊午年御紀ハ謂フ中ハ頭八
咫鳥ノ事ハ思ハ合サレ又新田氏ノ高時ヲ攻ム向ハ北
時稻村崎ハ至リ望マレキハハ賊軍海陸ハ克ク滿テ
通ハ可クズル以テ負シ至リ佩リ刀ヲ奉リ海神ハ祈ル北
けル小其夕海潮大ハ退リ賊舟遠ク散リ去リバ道ヲ
鎗倉ハ至リ城ヲ燒ケルハ會ハ大風吹起リテ易ク賊
臣ヲ亡シ不レたル者ハ元亨三年六月後醍醐天皇還
悉ク神助有リ者ハ幸ク御事御在リ坐ス翌年御世号ヲ建武ト改メ給
以テ農衆ヲ勸メ天下ヲ安ク爲ス也御在リ坐ハ爲シ
大ニ枉事ニ出ル未レレハ其故ハ護良親王威
名天下ハ照耀セ也御在リ坐ハ妬忌テ賴ハ后妃ハ賄
賂シテ御欠子ノ御中ヲ避テ奉ヒ爲シ其謀終ハ成レテ

龍眼初テ闇サレル日御在リ坐ハ不レ浅ク也同
年七月親王ヲ鎗倉ハ流シ奉リ給ヒケル不レ直義此
を獄中ハ弒シ奉リ尊氏ノ命ハ云フ尊氏東國
小下リ自征夷大將軍ト稱リ賊ト成リけル新
田義貞ヲ二亮ヲ令シ伐給へリ以テ世ノ乱再發
れル三年正月二亮京ハ入リ大小禁闕ヲ犯シ奉リ五
月人ヲ後伏見上皇ノ詔ヲ請テ奉リて反シ臣ノ名
を得タるヲ遁レテ橘朝臣湊河ニ戰死給ハ新田
氏ノ軍利非ズ小來テ新帝光明天皇ヲ立テ神器ヲ傳
奉リめテ霸府ヲ鞏ク下シ開キ先帝ハ眞ノ神器ヲ供奉

かて吉野小入せ給ひ皇居を其地小定定らせ給ふ北朝
南朝と世小聞えさする是ふう以以小於て一統の天下
二小分れ二日天上小出て天下其光を恠恠む北朝の
主ハ尊氏覇業を成す為小立らして北條の將軍小於
る状小異ふらず皇太子恒良親王を弒奉り又成良親
王を弒奉りて天皇の皇子三柱を失ひ奉り悪逆無
道北條小超え共謀邪術古古未有る所あり南朝小
ハ橘朝臣正行正俊以下の忠臣皇居を守衛奉れらハ
尊氏の威大ふりと雖も犯犯奉る事を得ざるハ快快
と雖も終小聖運を聞らせ御在在坐坐然れども神器

の傳傳ハる所是眞天子ハて御在在坐坐セバ以以時小當り
同ト日神の御末末ハ申セども
御裳裾河河御流清濁有有が如如ハハども甚恐けれ
君上の御上上ハ論論ハ奉奉ハ可可ハ奉奉ハ今
今注注ササハ唯君臣の間小就たる事との云所
あはばふり以以反賊の為小反矢ハ何何其晩年小至て
男直直父父小叛く為小行て以以討ち弟直義兄兄小叛
く故小攻て以以殺す是皇天の神誅恐恐ふと云むも
愚愚なる事小ころ 其北朝を立ると云ふ名のこを假て
眞眞小順奉順らら証証ハ其家人小土
岐賴遠遠と云者有けり光嚴天皇伏見宮小御幸御在在
坐坐て夜小入て還還らせ御在在坐坐東同院院ハて行過奉
ける小賴遠馬馬下下りり射奉り射人人ハハ射射比比れけ
るを怒りて車駕小向向ひて射奉り射下卑賤の者の射
奉る失争争てりて五体を損傷り奉る幸幸ハ何の御意
也御在在坐坐ずず雖も當昔天下の武士將軍有有を知て

△直り靈小中頃の
 世の乱小筑道小首より
 畏れ大朝之小射向
 いて天皇等々懐小奉
 りし一此條當時奏明
 又足利尊氏あし加
 小阿那可長天津日
 太神神大御傳を
 七思測しつる御惡
 う賊奴あつた云々
 と云れ一い然と事小
 云

上小君王の御在り坐す事を知らるが有る頼遠以
 小依て足利の手小誅られたりと雖も其平素足利の
 資人謾小朝廷を蔑如し賊尊氏の孫義満の悪其父祖
 奉れり状想像られたり奉賊尊氏の孫義満の悪其父祖
 小超越たり應永元年の事かり奉徳大寺實時公太政
 大臣を辞し申されける小義満請て奉代りむと申
 ける小平清盛公一以降武將小任せらるゝ例無と
 今以を望申す事驕僭の至あり奉勅許御在り坐さ
 りければ怒りて帝位を奪ひ己が家人を奉攝家清
 華准小准せしめむと強ふる逆言と奏しける小上驚し
 せ御在り坐して終小任されり抑帝王の御位と申
 すハ歴ツキし小天神の御子相傳へさせ御在り坐せば縦

や皇胤あつてむク小姓を賜ひて己小人臣と成れり
 上の神人共小許さる所帝位を思掛る者ふる小古の獲我氏と以賊
 と二人の之有けり尊氏が自征夷大將軍と成れり
 蝦夷が其子入鹿小繁冠を授け其弟を呼て大臣と云
 小似たり又其皇胤あるを以て帝位を奪ひむと云事
 小獲我氏の陰謀小似たり即を室町小構女を花御所朝延り
 小秘し隠しる事ハ彼が宮門ウツミカド谷宮門ノミカド小似たり古の獲我
 氏ハ今の足利氏ある事誰ハ以て惡むと云然
 て朝家の礼典を羨みて武家の礼式を定めし謂四
 武家故實是かり予常小云々武家の礼式ハ天下

の悖礼ふり如何に成れば將軍を以て天子に擬し王
臣以下天下の武士名族を來ししめ自南面して其礼
を受け式かして將軍の北面して天皇に仕奉り人臣
の礼を盡して公正の礼式を天下に天子の礼式を示す非私曲の禮不遜驕敖云
へうらざるめ非礼無作法ふり天下因准して公武礼
を殊に為る者と思へる愚夫愚婦の心と云者あり
漢人にも才や天子の職の礼より大なる莫し礼ハ
分より大なる莫し名より大なる莫しと云
るふ自名を犯しを乱して何をうか礼と云ふ浅
きふあり云へば更あり然る朝廷を輕蔑しめ王卿

謾り天下を吞噬する大志有ふ似合くす私小
使を遣して貢賦を明主に致し明主より日本國王に
封せられたるを和あひ掛かるも恐る皇大御國を穢
し奉れる世に共小道可くざるの大罪あり思
ふ小帝位を奪奉る事ハ天下の義引オド事ある
を憚りて彼より日本國王に封せしめて足れりと爲
る意ありむ名義の暗き事言の危なり文盲不文憐む可きの愚將おれ社あり然る愚
將おぐる天下に對して征夷大將軍あり實に危き世
ありけむと云ふ所今を以てし想像の事思えたりけれ明德三年南北御和
睦の御事御在り坐て後龜山天皇より三種神器を後

小松天皇へ傳進せしれ天下統一統の御世と成れり
 雖も將軍の儀凡て兼輿小等しして天下の人民
 天津日嗣の大御光を仰瞻奉る小則至るず營惑の妖
 光國土の罹る天下の興廢唯宣町小在る轉有ける賊
 首尊氏霸を定めてより十三代弒殺を免れたる者僅
 小數人世二百三十年餘義昭（ハカシメテ七代と云ふ）の一日として
 安き日無りけるころ皇祖天神トウ及矢の御罰御在
 一坐けるふりけり
矣満男二人有り兄を美特と云
い弟を美詞と云るが應永廿三
 年兄の職を奪ひひこして其謀世たるが故小兄の爲
 ら殺さる是一ふり永享七年鍾倉の持氏罪有り美教
 以を誅して其其瓜牙を断つ是二ふり嘉吉元年將軍美
 教其家人赤松滿祐を殺さる是三ふり以賊を私小使

小松天皇の御世に
 けり人のあふま
 けて和順軍と爲り
 名を美極と改む知
 川高國の逐出れ
 て河原を走

明主小遣して明主宣宗より日本国王と辱められ
 たる奴ふり礼を天朝小闕り異城の酋長を君主の如
 く崇敬ふ計の曲士おれば家人の午を假て天誅以れ
 至れるふり其子美勝將軍小任れ奉ける小馬より落
 て没る僅小十歳ふり是四ふり宝徳三年將軍美成
 亦書を明主小致せり後小美政と云る是ふり其子美
 尚親佐々木六角高頼を征小近江小行て軍中小死す
 是卑世あり幸僅小廿五是五ふり美政子無が故小美
 美視の子美材を養ひて美高の跡を継いで富山政長
 小逐れて越中（ハカシメテ）走れり是其六ふり次小將軍美高後
 小美澄と改む後美尹小逐れて漂泊の身と成れる是
 其七ふり美澄の子美晴將軍と成る京を去奔す常居
 有る事無く穴太山中小死す是其八ふり其子美輝將
 軍と任さる後松永久秀小弒せしる是其九ふり其
 子美那將軍と成りて無道あり闇愚ありて天下を
 治る器小非す終小織田公の爲小逐れて其祀を断つ
 是其十ふり如城と賊祖尚尊氏トウ以来掛おす恐
 こ天皇を大君と爲り畏敬し奉る故小其及矢
 以報忽小子孫小固及び其九族睦しうず親子兄
 弟の争ひ時として絶る事無し天譴永く子孫を苦し

公後水尾院年中
行事の所序を恐
降り時移りて廻り
仁の乱り諸國の武
士已の力を争ひ社
領者録分知の新領
を揮帥す事計ハ
降宮中日ハ空居
一て悉く保元建武
昔ハ似可なり非
内大臣信長ハ天下
掌ハ一ハハハハハ
と後管す事ハ成
武中東照宮親運山
徒と平リツ四ハ海風
を静め使たを籠
なると起しとを算故
一を下を憐愍
志高とス一殊ハ白
敷の古う新端と改
玉と跡を成り切他
信ハ云々記

一むる事歎ハ奇一者ふりけり借右ハ賊臣ハ在
レ朝廷上ハ征夷大將軍ハ任レ給ハ假ハ官階有
人ハ多クを如以無礼一ハ云ハ事ハ朝命を輕レ
ハ似たりハ雖ハ以ハ不臣ハ若ハ筆誅一ハ君臣の大
義を明ルハ所ハ其人の官爵ハ抱ル所ハ
其天朝ハ仕奉ルハ所ハ可ハ否ハ云ハれハ賊臣
ハ賊臣一ハ叛臣ハ名ハ正ス
ハ何ハ不敬ハの言を以テ史筆ハ
カニ公足利ハ衰乱を治めて天朝ハ仕奉ルハ事ハ實
あり時運ハ至レハ有ハ正親町天皇後陽
成天皇後水尾天皇ハ御在レ坐テ天下ハ照臨少
御在レ坐テ故ハ臣下ハ忠良の人追継ハ出未リテ
帝夜行ける世中ハ形を易テ天日再雲上ハ明ルハ
ハ東照宮遠江國小國神社ハ奉給ハ御願文ハ有

て給ハを以テ東照宮遠江國小國神社ハ奉給ハ御願文ハ有

得て見ハ夫以當社小國大明神者欽明天皇十六年春
二月出現テ這所以來累代聖主寶祚朝廷鎮護靈神也
為守國家永久立跡於東海之邊域也然則今當於人皇
百有七代御宇世既覃澆渚瑞鳳不到祥麟不出人心不
淳英邪無並起四夷舉兵革ハ荒動干戈更不聽理世安
民之政兵家康苟為八幡太郎義家瓜瓞受生於弓馬家
僅継箕裘之業以來遠悔先祖断絶近憂近世擾乱毅欲
興帝都之衰微重國家之擾乱致君於堯舜救民於塗炭
之外非素懷歎故不置心於一日片時泰山安造次於是
顛沛亦之焉尔今武田晴信起甲州郡内振威於隣國犯

近里遠境破却神社燒敵民屋仕吾意而不敬敵慮不用
武令妖孽居諸盛也葛藟相連無奈之何者也西葉不去
却用斧柯今既及強大畢彼多勢而將駿甲信上之兵予
無勢而司遠三國之士寔以寡對衆以弱向強敢非憑
當社之神力爭得勝之乎仰冀神力無納受於駿甲之間
速誅戮凶徒於目擊之裏矣故捧一腰之吹毛以類漢皇
之利劍也今以舉義兵全非所致私用絕世為興廢民
也於干茲玄鑑莫誤仍願書如件元龜三壬申陰九月廿
二日源家康敬白と見えたる以小國大明神神社と聞えり
るハ神名式小謂り遠江國周知郡小國神社の御事

小一宮記小大己貴命と書一奉れる是あり當時濱
松城小住せられし其國の一宮小御在り坐る以
し如女く御願を籠ませしありけり是即後神御基
業の最初神の御心神何れの時私戦を興し給
ふ事無と悉く公戦帝都の衰廢を起し國家の擾
乱を治め給ふし外小御心御在り坐るし其
故を以て天下をの大小名悉く靡從ひ給ふ懲罰め給ふ山徒毛の如く碎以て
朝廷其忠誠の意を御御在り坐る征夷
大將軍の職小并し給ひ右大臣の官を授けし御在
り坐る其御遺訓小元和二年三月十七日京都御臨

時の爲勅使廣橋大納言無勝卿三條衣納言實隆卿参
向之予細ハ前將軍太政大臣の極官ハ可被任との宣
旨を相述云く公御息を絶て給ハ無勿体以度蒙勅使
ハ冥加の程ハ恐憚有う云く文官ハ相國を限り
武官ハ近衛左右の大將を前途と爲り大閣秀吉愚昧
かりて我儘ハ慕り押て関白職ハ補せり此ハ事前代
未聞あり武家ハ三公九卿の并任有る事皇統の御威
光是より衰微するハ至るかり家康江府の將任ハ
憚有れども叡慮然止難く其上今更太相國の宣旨病
中と云ハ御請す可く様無し草創の前年より奢侈を

自制ハ質素を旨と爲るあり無勿体ハ見えて
太政大臣の宣旨を以てハ辭退申されたる事右ハ謂
ゆる足利義満とハ万ハ反對あり御事共あり其起ま
り右の御願文ハ在り如く朝廷の御事を御心ハ掛奉
りて武田信綱玄ハ叡慮を敬奉する事ハ慣りし
給へるハ以て然る乱世の中ハ長く給へれども右
ハ大業をハ克知り給へるありけり今幕府の士人謾
ハ王室を慕如くを以て美事と爲り東照神幕府と江
戸ハ開給ハ征夷大將軍を任と爲て天下を守護の掛
すもハ可畏く天皇の御楯と仕奉り人臣の道を盡さ
せ給ふ御心あり事今更ハ申すべし非事なり然ハ
有れども世とを經る中ハ少ク驕僭ハ過させ給へ

か如く見ゆる事共有り併と儒との爲小東照神の光
を覆ふ事共多うり其大なる者ハ伊勢神宮小舟内親
王をば小奉りせ^給事恰ハ乱世の如くある小東照
神の神廟ハ大君の金枝五葉カテ渡り給ふ親王
を以て傳ふ供せし事事實小君臣倒反せると云者
あり頃日水戸殿の明訓一班抄を見ら小神君薨御の
節御遺言ハ神道ハ可奉祭の仰小付吉田ハ庶流ハ
宗源の唯一神道ハ久能ハ御葬式ハ相成たり
を唯一ハ僧侶共抱^抱事不相成り故其後を残念
ハ思ひ其後天海坊主ハ邪智を以て台徳公を欺奉り

宮ハ御方を我弟子と爲て関東へ下向致し置く所ハ
万々一奸賊の爲至尊を奪取し北なる所ハ坂方へ下
向致し置所の宮家を以て至尊と爲る所ハ朝敵ハ不
相成との義を主張し夫ハ就て色々説を云て終
ハ神君の尊意ハ山王の神道ハ西部の思食ありと
て託^カづけたり^御台徳公を奉初具時ハ御彼人何れハ
^{御遺言ハ違ハて唯一ハ奉祭ベシ様無}
^{後ハ天海坊主の思付て後ハ台徳公を欺奉り}
^{御遺言ハ御遺言ハ昔ハ西部神道なりと託づけたり}
第一ハ神君の御遺言ハ背られ次ハ宮家を下向
せしめ坂方ハ一至尊を奪ハれたくハ時ハ我弟子
ハ宮を至尊と爲れハ自分ハ開山の事故至尊の御先

祖同様小尊やれいて深遠の巧を爲る者なり何様所
賊の爲小至尊を奪はれ日本開闢より皇統綿々たる
を万一絶ふいと爲る事を怒給ひ、宮家を御二人の
御三人の御子厚小御下向小被遊候事不相成訣し無
之至尊の御血統の絶ふ事を重し給ひて被遊候事
あり、何なりや於京地も彼是の思食し有へざる、天
が爲小御主人家を天海坊主の弟子小爲し堂守の爲
給ふ事神君の太政大臣を御許退被遊又ハ御廟を
結構小不致様小との尊慮小叶申すべく全く天海
坊主の邪智より出たる事なり譬ハ御普代大名の中

小ても神君の御爲小命を捨て忠を尽したる人々數
多有る所是皆神君の取し給ふ小有益の人々なりと
も其者の爲小三家三卿御家の人々の庶子娘等僧小
して堂守小爲いとあり、許容爲やトさるる怨れハ
大小相違ハ有とい理小於て主君家の人を坊主と爲
し堂守小爲と云ハ有る事なり神君御初御代ハ
御庶子姫君を僧と給ひぬ故を思ハ僧小爲給ふ
事ハ好給ひぬ事あれば御自身好ハ事ハ天下の人
民迄ハ押及し給ふ天下を知食る方々の御役あり
況や御自分ハ好せしむる事を御主君家を異様

の僧と爲て御堂守小被遊る事神君の尊慮小可應事
 小非ず長る中の有志の御方有之時天下乱の基
 あり云し書して公小猷給へるは流石小東照宮の御
 子孫程有て至誠の忠言を盡し給へる者なり
又書一
 前中納言身昭卿の御作なり今世小傳ふる本共誤脱
 るれハ教本を板合せて引り右の堂守を一本ハ堂
 主と作るハ有り其奥書云ハ一巻ハ弘化二年乙巳八
 月十日閑老伊勢守阿部正弘が物せハ小塾讀して誠
 忠の程感伏すと序文の趣ハ有れども不樹公へ参
 りせ侍る由申遣せし云と書し給へれば公ハ
 實ハ良ハハ思食けりと未其時の至りさうハ故
 小其事行ハれて止ぬるハ或云く僧正天海ハ是
 利義政の弟美視の庶子なり美視一妾有り乱世儒伯
 小間城を置く事能ハずハ其身と成ぬるを陸奥の葦名
 家ハ下しつゝが其家小生れたるが故ハ足利を名策
 ずハ雖も實ハ美視ハ密子なりと云り然る時ハ賊將

算氏の子孫ハ如城ハ其計を企て將軍家を欺奉り
 天下ハ悪毒を流し事一念ハ邪惡子孫ハ至る迄滅す
 其子孫を殺し令逐る者なり又儒流の言亦大ハハ御爲ハ巨一
 くりざる事共ふハ有ける年中林ハの手ハて
 本朝通鑑を編て奉る其首趣ハ我朝延ハ皇統一系天
 地開闢以來君臣定りて君臣の多の重き事天下万国
 小冠たるを忌て恐る我皇統ハ西戎ハ謂ゆる吳
 太伯の裔と云安説ハ附會て暗小君臣の大義を輕と
 して武威を張ひと爲る書成て出たりけりハ依て水戸
 家ハ大日本史礼儀類典の二部を著して天朝ハ猷
 り府朝小進せりハ天下ハ弘ハ給へるハ依り具

〇日本書紀傳三十一
 〇二百七十八

△東照宮の石室に
を遷して其墳に
幅り失神國之不振
私欲之深は其事不
備の將軍職たりと花
さで給ひて何方迄
人臣の道と踏行之
給へず御旨が違はれ
右守の聲は將軍
家として逆賊の
一入る罪人なりと
云ふ

慎
必

狂妄の説止たり。雖も猶儒流の輩私に其説を守れ
るも有と。又私に上様と云ふ上ハ古より和漢共小
天皇の稱あり。東照神乃小御護遊の御旨小違小可
し。又新井君美ハ王号を以て啓す。其余の諸儒今小至
り迄改る事無し。抑王ハ大君と訓して上五十小注六十
如く天皇を始奉り皇親の御方小限奉る御事ハ
人臣歟を用ふる時ハ啓号ふるざる事を得ず。伏生
茂卿ハ天皇の御事を共主と書奉れり。歟ハ西戎戰國
の時列國の人共周王を輕侮して法云稱ふるを用ふ
る事不常當の至ふり。大宰純ハ山城天皇に申せり。闇小

△高朝の依て東の王臣
朝延をいひ申す
然るハ

△ハ又其私小用ふ
る祝詞ハ東の遠朝
定ル坐坐天下所知
後征夷大將軍云々
云々ハ何事ハ古事
記明宮殿ハ大権命
執事國之政自賜
と見え万葉三十一
吾大三之天下中納
賜者ハ有ハ皇子ハ
坐坐ハ天統を述
給小ハ非ズヤ此等

關東天皇小對へたり。伴信友、櫻雲記ハ江戸の大朝
廷ハ天下所知食すと云ハ平田馬胤ハ靈真柱柱ハ東
御府と云ハあハ名分の乱大ある者あり。室直清ハ文
小文昭王昇殿と有り。何れの幕府ハ王位をハ纂ハセ
給へる。其主君を以て反賊小賤者と云へ。服部元
喬ハ文小勝國又國勝と書り。皇朝室祚を無究小傳さ
せ給ひて革命の御事御在り坐す如何ある書体あり
又中井積善ハ東照宮の御事と大君と書せり。大君ハ
歟の訓ハ本より皇親小限奉れり事ふる。西蕃ハ
易小出て天子と云の事ふるを混と云ハハハ事共あり。又東

照宮を世俗小神祖と申せり歟ハ孝徳天皇大化三年
御紀の出て皇祖の御事を申奉りし謂ゆる神漏岐ふ
れハ僭称なる事を得ず其外柳宮の御事ハ就て
鳳輦鸞輿又ハ丹鳳城玉池ふども字を用ふる事ハ
在れども皆西蕃にて天子小御所ふを謾り小犯
事ハ有らずト云ふり然るを朝廷を輕侮し奉り時
世ハ阿諛りて然る僭称を以て徳川の御家を虚偽
聞ゆる事ハ東照宮より以降朝廷を崇重め奉り官職
を朝廷より戴奉り給ふ以て人臣の礼を以て仕奉
給ふ御本意ハ背奉る事なるを天下小主張りて官ハ

△己が神の宣給ハ
ザヤル神國一書窮
之古抄者不可敬也
知路學士三代同
孔之聖経革命之因
風俗可加回也
有るが何小願い
一世人

大臣ハて坐せハ天皇の御前小侍ハ以て食國天下の
大御政を執申し給ふ官あり征夷大將軍と聞ゆるハ
天皇の正朔を奉りて皇憲ハ背り奉る者トハ四
夷ハ蠻の末迄ハ攻て事向る可う御職小生ハ故ハ
天下の人民の仰從ふ所歟ハ在り徳流の輩其辨ハ
無く名稱を乱るハ有ハ帝皇を貶し奉りしと爲て
ハ被ハ謂ふ天下者天下之天下而非一人之天下と云
事を先ハ立て孟軻ハ賊ハ者惡言を以て誣る者有り
天朝の御爲府朝の爲名を乱るの罪極逆ハ勝れらる
知ざるころハ心憂る事なりけれ養老の律ハ謀背國從

○日本書紀傳三十一
○二百八十

合右小筆大東照
宮の御殿文小武
田信玄が不敬殿
を神の御奉り給
いへ憤り給へり其
神の御心小背り
知ず及矢の御恐
を給へり若ふら

玉
▽玉勝間小孟子終焉
只親小孝可事
のミと敬云々
事無一云れたら
く神明の怒り給
所正小以小な

偽を謀殺と云ひ指許来與情理切害を大不敬と云て
共小八虚の罪ある者如何ハ可畏御事
因の云ふ通達引候藉五雜俎云物小倭国
亦重儒書凡中国経書皆以重價購之獨無孟子云有
猶具書往者舟輒覆溺以亦一奇事也と有ハ彼が惡言
ハ人臣の心を驕傲し君上の威を貶しむるの媒
と成て往し乱を生丁可き種ハひふると皇神等の
惡き也給ふありり其ハ以方ヤシ人知ぬ事ある
を彼ヤ持渡り者の具異驗を恐れた事万國ハ比
無き美事と云べし又武備志日本国嗜好都ハ五経
則重書礼而忽易詩春秋四書則重論語學庸而惡孟子
云い見えたり谷川翁云く西土統有刺孟疑孟辭之
作本邦蓋亦有其人也夫當孟子所不周尚烏天下共主
然數説放伐以動君梁君以所以我神人不慊聞之也
云れし然説あを以孟子を讀訖りて八虚の罪
を起し天下小毒一人ハ福ヲ者多かりけりハ如
何也上五下小注一奉れりが如く我國家ハ天地
天地

開闢以来君臣初めて立て具美の重事天地と共小
具位を易ふ可うござるあり又天稚彦が僭立て君
臣の受を錯り天使を射返し其矢天上小至れり
を以て天神及矢の御刑罰を行つて給へり及矢
可畏いと云ふ事本一度立て万世小動と可うござる
律是あり但此ハ獨皇國の臣民の之然るハ非テ國土
小君臣の分己小二柱御祖神より定りて大八洲瑞
穂國ハ大君小して彼蛭見淡洲の名残成れる外國ハ
一七御子の例小入らずと詔給へり下して臣下と成
一給へり不蕃國を御奴國と訓し事亦其君臣の美

を取れるなり然れば万国の大なるは我天神の御奴
たりざる事無きハ固ト一の事なり所以小諸蕃の國
より負氣無き心を起して我皇大御國を犯来る者
一と爲て反矢の神罰を免れ奉る者有る事無し其一
二を試みよむハ弘安四年蒙古襲来の事を漢籍五
雜俎ハ元之盛時外夷朝貢者十餘國可謂窮天極地固
不賓服而唯日本岬強不臣阿刺罕等率師十萬往征得
返者三人耳と見えたる以時の神風人の處と知る所
ふれば注すハ及らば又後崇光院御紀應永廿六年六
月廿五日條云抑大唐峰起事有^{其沙汰}云々出雲大社

震動流血云々又西宮荒夷宮震動又軍兵數十騎廣田
社より出て西方へ行く其中小女騎之武者一人如大
将云々神人奉見之其後狂氣云々自社家注進伯二位
馳下尋寶否云々異國襲来勿論歟同八月十一日條ハ
合戦難澁の時節何方よりとハ知す大船四艘錦の旗
三流指たろう大将と思し^{ミハ女}ハ女^人なり其力量不可
くず蒙古ハ船ハ衆移りて軍兵三百四人手取ハして
海中ハ投入大将蒙古ハ弟其外以下の者廿八人ハ即
時ハ斬弄相残七人ハ上意ハ依て上了可し云々^有
あど兩度共ハ神^威減ハ加ハるセ御在り坐て強敵を塵

と爲給へるハ謂ひる反矢の御例にて御在り坐す御
事申すも更ふり欺を以て我天神御子の御上り於て
ハ天壓神と御在り坐す大御按威を振り也御在り坐
す万國の兵を併せて寇し来り事有る少くも退り
せ給ふすは御事あり殊更小征夷大將軍と聞ゆら
ハ天皇小俯く者を討平げ給ふ御職ハ坐せば天壓神
の大御勢を戴持奉りて給ひ其外寇をし一寸の地
をも醜虜の爲ハ犯さし給ふ事ハ御事とよ然
比間傳聞ハ近年醜類の神國ハ来り犯す事を安り
し所思して朝廷ハ於てハ彼を討退けさせ御在り
坐す其勅命を下さるるを東武の俗吏ハ一家の富を
欲す心々天下の太氣を怒りて和親交易を事と

す皇天其ハ爲ハ赫怒くせ給ひて三月三日紅雲の怪
を示給ふと雖ハ王安石と云ふ鳴呼の者ハ云ふ如く
天変畏るハ小足すこや思ふは祖宗の法ハ復す事
能ハず空しく手を束ねて國を亡ぶを待つのハ然
る小此頃便有て聞うと其本國阿米利加と云ハ國
の乱出來てハ小滅ハひぬさこ云り也反矢の御討其ハ
出未初てハ猶諸國ハ巨る右件ハ所謂反矢可畏
ハと今ハ神の御計を行のハ右件ハ所謂反矢可畏
之縁也と云事の實驗を奉て後來君臣の大義をし
乱ざしめむとし如也ハ長説して有る諸我天神
御子ハハ其卷首ハ住し奉る如く天下万國の天皇
ハ渡りせ給へれハ時として強臣の有るハ何ぞ無
道を誅する事を憚らざせ給ふ可き然れどハ神武天
皇の東征の御時天壓神と称奉りて下臣皆叛の者を

○日本書紀傳三十一
○二百八十三

討平うせ給ふ事掌中の物を取ら如く御在り坐けり
八日神の御子と爲て影の隨ひ壓躡むと爲させ御在
し坐けるハ武時皇國の内にてハ未王澤小信ハさる
所ハ有て方境廣くさずと雖も外ハ蕃國の有て帰化
ヤズと所聞食たむむハ武時勢ハてハ万國の全を
ハ討て帰順させ給ふ可き御有状あり然れば武天皇
より開化天皇小至る迄の御政ハ八洲の外ハ及ばせ
給はずふがう万國を統御させ御在り坐り御意味ハ
て渡らせ給ふ故ハ天下ハ照臨させ給ふ御上ハ於
て女々疑がらせ給ふ所あり御在り坐る所以

小崇神天皇の御世の末ハ至り任那國より朝貢を入
れ垂仁天皇の御世の始ハ新羅王子天日槍帰化と雖
も當然の事と爲り具未田々更ハ疑ハせ給ふ御事御在り坐ざ
りし仲哀天皇御世ハ海表韓國を神託ハ依り授けり也
給ひしハ神功皇后御親征の御事御在り坐り其首
長を従させ給へり武時漢蕃の外ハ在り事を未所知
食せ給はざり故ハ三韓ハ止給ひしハさるハ在
りた小所知食せ給へりむハ漢蕃をハ道口と爲し
万國をハ討て取らせ給ふ御心御在り坐る事其御軍政
の御消息を以て想像あり奉り御事あり然るハ應

今より以事書早かりし頃土佐國人松下弘茂に云ふ遺言に云く、神代卷の談論に有る漢籍の成り事、世の言と成り事を云ふより大在天皇へ御後を譲奉りし事、自費給へる余り御事より、彼夷封が事、述習の給ひて一傳小兄弟の文を給ひし御事思奉りし事、甚しき思ひく漢籍の天下の言と成り事、こころい思ふれと云ふ言とられたる説か、りり若し

神天皇十五年御紀小百濟王遣阿直岐略中於是天皇問阿直岐曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是奇也略中仍徵王仁也之有十六年春二月王仁來之則太子菟道稚郎子師之習諸與典藉於王仁莫不通達と見えたり以程より漢蕃の聖人之云者有て其経籍と云者ハ天下を經綸道ありと所聞食て頻々慕ハハく成りせ御在し坐て王仁を徵給へるなり太子ハ能具道ハ通達爲させ給へうと思へりて天皇崩御の後ハ天皇の大命小荷奉りて帝位を兄王ハ讓聞えうせ給へるハ其典籍ハ通達ハハ伯耆叔舒ハ習ハセ給給へるハ今然ハハ我古意ハ非

ず又仁徳天皇四年御紀小詔曰自今之後至千三載悉除課役略中是以宮垣崩而不造茅茨壞而不葺略下と有る書の堯典を擬げ給へるなり是を以見れば西方小聖人の國と云物有と所思りて其頃の御心ハ彼と我と歎トシ仰の國と云程の御事ありあり可ハ以於て我先王の道ハ參へて堯舜の道ハ用りて御事と成て始て我古を疑りて給ふ状ハ成て皇威次ハ小衰うせ御在し坐て其是ハ小至てハ推古天皇十五年御紀ハ小野臣妹子遣於大唐以鞍作福利爲通事と見えたり以時皇朝より賜る所の御書を日出處天

神代卷書紀傳三十一

〇二百八十五

子致書日没處天子無恙帝覽之不悅と有るを以見れば
 天神の御子と御在り坐ぶがう蠻夷の酋長小書を賜
 ふ小如以て歎体あるハ勿体無事御事して内外を取
 失つて給へりと申さむハ強事ふくす其時上の女帝
 かし御在り坐（此中奉るハ恐有）攝政ハ聖徳太子小在り大臣ハ獲我
 馬子（其が資入ハ漢直の輩あり）世中を搔乱す頃間（此れ殊ハ其不め給ふ事有て初事云ふ事）ければ天地の神と
 り未嘗て有ざる君臣の國体を失ひて給へる事云ハ
 絶たる大禍事あり是全く漢蕃の書典の世小弘れ
 が故小や未る殃のて天壓神の大御後成と貶しめ奉
 れる事共あり（其漢博士の世小害を成す証ハ右二百
四十九下小注に如く崇峻天皇五年

御紀（小）十一月癸卯朔己馬子宿祢詐於群臣曰今日
 進東回之調乃使東漢直駒殺于天皇と有る東漢直ハ
 桓武天皇（年御紀）小謂曰る文忌寸元有る二家東大祢
 直西文男首と有て代て儒業を以て仕奉れる氏人ハ
 少其賊首馬子ハ何を以て詔くハれしと云ハ皇國の
 神民ハ固有の和魂有る故小然る纂弒の事を云て
 誰ハハ策引い儒生の常ハ湯武の放伐を以て口實
 と爲る者ハ在りければ其を道とて恠しむ者あり
 ざるを以て然る逆事小使ハれたうし者ありけり又
 皇極天皇四年御紀逆賊入鹿を誅せしめ給ふ所ハ蝦
 夷於漢直等（採集眷属）環甲持兵助大臣設軍陳と有
 一賊蝦夷を助けて朝敵を己小爲むと爲しハて文博
 士の大義小疎す事ハ以て見つ可し其時ハ中大兄使
 將軍巨勢德陀臣以天地開闢君臣始有説賊皇令知所
 起と有る賊皇ハ漢直あり皇朝小參來居しとぞハ皇
 憲を知さむハ者あり故小君臣の起る所を令知し漸
 小解しめ給へるあり是を以て忘神天皇以未漢直の
 者共彼を引て我先王の大道を愆せたる事云七數
 へハ盡し難き者あり可し然れば右の情至ハ賜ハせ
 たり御書ハ漢直ハ説く所小隨ハて歎体の書法ハハ

物為つゝ 右の如く我天皇一統の天下所思食一究め
かめり 御在し坐ける小應神天皇御世く我小等同一
き者有りとの御疑の出未起ハ全ク書生の言小
出て終小漢蕃をバ諸蕃の上ハ置テ後ハ歎体の國
と思誤レセ給ふ小至れるハ若ク歎明天皇十三年
御紀百濟王聖明が佛像經卷を貢奉る表文小是法於
諸法中是為殊勝難解難入周公孔子尚不能知云々夫
遠自天竺爰洎三韓依教奉持無不尊敬云々と奏一聞
えたる小天皇驚クセ御在し坐シ獲我大臣稻目宿禰
小令問給へる小奏曰西蕃諸國一皆礼之豊秋日本豈

獨背也と奏セるハ政時忠臣の議論ハ有一事ふれども
其ハ措シ我皇神の上小佛と云ふ尊者有リ我皇國
の外小天竺と云ふ貴國有と上下の人ハ然ル僻説小
惑へるハ國力倍小衰微へ皇威日小弱クせ給ハ終
小ハ聖武天皇の如クハ東大寺の大佛と頂礼して三
寶乃奴止仕奉流 天皇羅余盧舍那像能大前に奏賜部
奏スあど小假カ小天神御子の宣ハ出ス御事を
天下小表して詔給へる小至れるハ今京ニ成テハ
天皇の大御心ハ任セ給ズ者ハ一向ハ山注
師と云へバ恐れサセ給ハ初命を奉ルるハ暴

悪を恣小爲るを許して朝野小横行せしめ天下の
賊を盡して寺塔を建させ御在り坐す事と成て悪逆
の徒と雖も僧法師と成れば刑を加へさせ給はず無
頼の僧有て天下の皇憲を犯すと雖も指給ひ小至れ故小皇威と國威と合
せて今の如く成以て行て佛衆小對以て天壓神の
大御綾威七何小御在り坐さるふじ皇祖天神小對奉
りせ給ひては甚し可恐る御事ある小ころ然して具
用ひて猶目大臣ハ天下小惡毒を流せるのこかす
冥子馬子ハ法の為小忠臣守屋大連公を滅討さへ有
小天皇を弑奉りて逆賊と成れしと法の為小聖徳
太子七坂を誅はれざる更あり冥子孫小至てハ原
氣無き心を起して帝位を奪ひむとさへ為しざり
佛法の君臣を乱り大業を失ハりむ事枚挙べからず

さるが若て又近世小西洋諸蕃の國々の往來有る隨
ひて奇詭淫巧を渡りて俗人の眼を暗やしの天主耶
獲の邪教を説て人心を惑わしむる事小盛小成れり
古其徒の多し或はこれを見行しく我皇民ハ勝れり者と
爲る時ハ當りて四夷ハ荒る船艦を渡りて交易を乞
ひ通信を謀る其无礼非法天下悉小欺を怒り所あり
然れども東武の俗吏儔小非れば佛の人あり佛佛小
非れば洋教の輩あり虜の美を説て内を弱くしの彼
の大を述て我小を卑しむ航海の醜類ハ拒る爲へ
く内地の賊徒ハ終小制む可うる是を以て和親悉

小調ハ交易倍繁一天下の武備此ノ為ニ解リ國土の
賊寶其ノ為ニ亡ビ年有ズリテ國家の困窮更ニ名ク
可クシテ至レリ今茲天下の中ニ葬表葬を分ラ内
外を混ルル者獨皇家のこテ御在リ坐レテ斯ク非常
の時ニ故ニ有レリ天神御子神武ノ御在リ坐レテ
外表の所置を背イセ給ハズ恰ハ天照神の天降ルセ
御在リ坐レテ如クテ武士の情此々を勸メ給ヒ其卒
の怯ミを起シ給フ大御政御在リ坐バ此方より退給
ハズ今日迄武士の心被レテ國を弱心見慢ラテ近ニ小軍兵を
師ニ向來ベシテ彼大炮小銃ハ得ル所トシテ射

向ハ奉ルル天神の御定の任ハ反矢を射放ルル給
ヘシハ一發を以テ彼ガ千箭ハ勝ル可ク一旦夷虜
ハ邪法を行ヒテ人を瘁ルル事有リ其時小臨ミシ
道无クヤハ神武天皇戊午年御紀小冊敷田戸畔ト
云者を誅メ給ヘシ小時神吐毒氣人物咸瘁由是皇
軍不能復振ト有レリ其彼處有リ号曰熊野高倉下忽
夜夢天照太神謂武甕雷神曰天葦原中國猶聞喧擾之
響焉宜汝更往而征之武甕雷神對曰雖予不行而予
平國之劍則將自平矣天照太神曰諾時武甕雷神登謂
高倉曰予劍号曰節靈今當置汝庫裏宜取而獻之天孫

高倉官
文庫

高倉官
文庫

高倉曰唯^レ而寤之明旦依^レ夢中教問庫視之果有落劍
 倒立於庫底板即取以進之^レ有^レ以^レ御事を古事記小
 天照太神高本神ニ柱神之命以^レ見^レえ^レ故受^レ取^レ其
 横刀之時其熊野山之荒神自昏^レ切^レ仆^レ有^レか^レ如^レく^レ戰^レ盡
 天神御子の危^レき境^レか^レ至^レれ^レか^レむ^レハ^レ天神天上よ
 り見^レ行^レ一^レ御在^レ一^レ坐^レて然^レ助^レく^レ也^レ給^レふ可^レき御事令^レ申^レす
 非^レず御事^レあ^レれ^レバ^レ天^レ壓^レ神^レの^レ御^レ勢^レを^レ疑^レふ^レ所^レ無^レく^レ押
 張^レく^レ也^レ御在^レ一^レ坐^レて四^レ夷^レ八^レ蠻^レの^レ酋^レ長^レ共^レを^レ交^レり^レ召^レ給^レふ
 一^レ御^レ馬^レ飼^レ部^レ小^レ使^レハ^レ一^レ給^レふ可^レく^レ八^レ十^レ船^レの^レ貢^レを^レ召^レむ^レ事
 八^レ十^レ綱^レ打^レ掛^レて^レ引^レ寄^レる^レ事^レの^レ如^レく^レ御在^レ一^レ坐^レて^レ國^レを^レ富

